北海道商工業振興審議会　第１回　小規模企業振興のあり方検討部会

議　　事　　概　　要

日時：平成２６年１０月７日（火）　10:00 ～ 12:00

場所：北海道庁本庁舎９階　経済部１号会議室

１　開　　会

２　挨　　拶

○　経営支援局長から挨拶

３　委員紹介

○　事務局から委員の紹介

４　議　　事

（１）　部会長の選任について

○　小樽商科大学　商学科教授　穴沢　眞　委員を部会長に選任

（２）　「本道の小規模企業振興のあり方」の検討について

ア　事務局から資料２の説明

イ　説明に対する質疑　特になし

ウ　主な意見

（ア）　総論

◎　地域の要望を取り入れ、コミュニティの担い手に商店街がなっていこうということを踏まえ、水道工事など、高齢者の注文を商店街が一括して受けている。商店街に頼むと安心という高齢者の意見がある。

◎　商店街の加盟店は３年前は７０店だったが、今は９０店。物販からサービスへの転換をしようと活動している。サービスの中に物販も入ると考えている。

◎　小規模事業者、特に商店街、飲食店が地域のコミュニティの担い手になっている。地域の商店街がなくなることによる地域のコミュニティの崩壊が全国的に問題になっている。

◎　小規模企業はあれもやりたいこれもやりたいと言うのは現実的には難しい。個別の事業者の特徴、環境などを見て相談に乗る必要がある。「気づき」を与え、支援というより企業の良さを外部からサポートし、自力で取り組める方向に持っていくことが必要。自社で考える力を有する人材を育てることが長期的に取り組むべきこと。

◎　小さな企業の強みは、自分で自由に判断できるので大きな会社にはできないユニークで大胆な判断ができること。現場が忙しくなると視野が狭くなってくるので、気づきを与えてくれる人がいるといい。女性の経営者から相談を良く受けるが、営業面、値段設定、商品開発に特化して支援をしていくと事業が継続しやすいと思う。

◎　創業資金を金融機関から借りる際、事業計画は立派でも介護ビジネスの経験がないということで苦労したが、行政の創業支援のための制度融資で借りることができた。創業支援ではこういうことも大切。

◎　女性の社員が多いので、ワークライフバランスへの対応は経営者として悩みが多い。

◎　介護福祉で一番大きい問題は人手不足。特に、幹部に育てたい若い人がなかなか採用できない。また、若年者をいかに研修していくかが難しい。大きい会社だと外部研修とか、ハローワークの助成金などもあるが、小さい会社だと難しいと感じている。

◎　私は職人であるが、経営も、デザインも全部自分でやっていては時間が足りない。一人ではできないことがすごくたくさんある。

（イ）　小規模企業支援に係る基本的な考え方について

◎　商業者の立場でいうと、札幌はもちろん、地方も大型店、郊外店ができて中心部は疲弊している。その大型店も苦労しているところがあり、閉店する可能性もある。そうなると街は崩壊してしまう。そうならないよう行政ともどもまちづくりという観点から考えたらどうかと思う。

◎　若い人をどのように見つけて、どのように育てていくかが重要と考える。女性は子育ての負担から働くのを躊躇する。若い人を採用して育てて人並みに生活させるためのハードルがすごく高い。売上を伸ばさないと高い給料を払えない。若い人や女性が働く上での（保育等の）インフラを整えていただけると助かる。

（ウ）　支援施策のあり方について

◎　収益の柱が一本足だとその事業の失敗が即廃業に繋がりかねない。何本か商品やサービスを持つこととか、お客さんを何種類か作る、いくつかの柱を持つことを支援することで、失敗したときにとりあえずつぶれない。経営の多層化や、新たな事業を創造していくことを上手く支援していければいいと思う。

◎　女性への支援については、保育園を増やせなくてもファミリーサポーターを増やすとか、そこを利用する際の金銭面での支援が考えられる。また、女性の側の意識改革も必要。夫に育児をさせることに、女性も含めて世の中の目がすごく厳しい。両立で行かないとならないと思う。

◎　学生の意識が私の時と違う。夢がない状況で、すごく現実的。せっかくこれだけの自然がいっぱいあって環境が整っているので、もっと広い視野をもってもらえたらいいと思っている。

（エ）　支援体制のあり方について

◎　新たに作る前提ではなく、今ある現状のいろいろな支援体制を機能的に使う。ネットワークを繋がりやすくすれば機能的な支援体制ができるのかなと感じる。連携という文字だけではなく、人と上手く有機的に繋がるような仕組みができれば良い。

◎　一人一人の考えるアイディアの延長ではなくて、他の人の見方が繋がると新しいアイディアになる。そういった場を作りつつ、支援体制としてそれを伸ばしてあげるようなことで新たな取り組みをやっていくということが出てくる。

◎　全体を底支えする支援の一方で、突出して引っ張っていく部分も必要。新たな産業構造の支援の場を作ったり、それを伸ばすためのサポートをやれると、北海道としてすごく面白い取り組みになると思っている。

◎　小規模企業を全て一括りにするのではなく、いくつかのカテゴリに分けて考えていくとより実のある施策になると思う。

◎　施策のＰＲが足りない。浸透していない部分があるのではないか。お金をかけずにできる部分が多々あるかと思う。やり方の問題。

◎　労働力が減少している中で女性の活躍の場がこれから増えていく。女性の社会進出

は日本はかなり遅れており、バックアップ体制の課題、個人に依存する形だったのをこれからから社会として、もしくは行政として見ていく時代に移りつつあるという気がする。

◎　新しいアイディアのほとんどは「新しい組み合わせ」。一人で考えるよりは、いろいろな人と考えて新しいものを作り上げていく。どのようにネットワークを広げていくかというところに最後は繋がっていく。そのようなことをリソースが少ない小規模企業はやらなくてはいけない。自前ではムリなことをお互いに協力しながらということになる。協力の仕方として、ほどよい緊張感のあるネットワークが必要になるのかなという気がする。

（３）　その他

○　事務局から次回部会について説明

出　　席　　者

【委　員】

小樽商科大学	商学科教授	穴沢　　眞	委員
株式会社シンプルウェイ	代表取締役	阪口　あき子	委員
株式会社２４Ｋ	代表取締役	高瀬　季里子	委員
発寒北商店街振興組合	理　事　長	土屋　日出男	委員
北海道よろず支援拠点	コーディネーター	中野　貴英	委員
株式会社ジュネリカ	代表取締役	西原　　潤	委員

（五十音順）